

「NIM 臨床診断学 検査編」 第3版

国立病院医療センター・院長 高 久 史 磨 監修
 癌研究会附属病院・副院長 尾 形 悦 郎
 東京慈恵会医科大学教授・内科学第3 橋 本 信 也 編集
 京都大学教授・第2内科 泉 孝 英
 神戸大学助教授・内科学第3 中 尾 實 信

福岡大学教授・内科学第2

吉 田 稔

臨床医学の基本は診断学に始まり、診断学に終わるといっても過言ではない。

診断に際し、医師はまず患者の主訴(自覚症状、症候)を中心に病歴を詳細に聴取し、更に視診、触診、打診、聴診などの理学的検査を行って、他覚的所見、徴候を把握し診断の手掛りとする。これについては、本書の姉妹編である NIM Lectures シリーズ「臨床診断学 診療編」にまとめられている。

本書はこれに対応しての「臨床診断学 検査編」である。本書の第1版が出版されたのは1977年で、ほぼ15年前である。第2版は1985年に改訂版として出されたが、それから今日までも臨床医学の各分野での著しい進歩に伴い、当然のことながら検査医学 laboratory medicine もその守備範囲が拡がり、より専門化し、かつ多様化してきた。

そこで時代の要望に応えるべく新たに高久史磨、尾形悦郎先生の監修のもと、執筆者は第2版での31名から今回の第3版では83名と大幅に増員され、形式、内容も一新され充実されたものが出版された。

第1章「診断学における検査の意義」では臨床検査の意義・あり方、データの取り扱いなどについての基本的事項が取り上げられているが、本書を利用するにあたり、まず目を通されることを薦めたい。

第2章「一般症候からみた臨床検査」では主要症候についての基本的考え方、それに対しての“まず行うべき検査”、“確認のための検査”、その後の“フォローアップに必要な検査”が小見出し付きでわかりやすくまとめられている。つまり、臨床検査の進め方、指針が具体的に挙げられており、現代の医療に即した初期診療 primary care、救急医療学 critical care medicine に際し大変参考になる。ここには症候から診断に至るまでのストーリーを作り、思考過程が示されていて“考える臨床診断学”についての基本を学ぶことができる。

第3章以後は臨床医学の各領域における診断学、検査医学についての総論、各論が監修者、編集者の意向を十分反映し系統的に記述されており、本書の特徴がよく表れている。

ここでまず、各領域で特に必要とする検査、特有の検査についてのその方法、内容、その評価などの基本的事項が総論として取り上げられている。次いで“症候からみた検査”の項では、それぞれの症候から考えられる疾患、それに対しての必要な検査、検査データの解釈、評価、確定診断のための検査などについての要点が整理され、大変簡潔にまとめられている。

これを踏まえて最後に各論としての“主要疾患からみた検査”の項が

挙げられているが、簡便にまとめられており、実際に各々の症例について検査プランを立てるうえで大変参考になるであろう。

本書のような症候を中心として考える臨床検査医学の本は、今日のように専門分化が進むなか、今一度、疾患、病態を総合的に考えるという観点からも大変有益なものといえる。ちなみに本年度からは、医師国家試験の出題基準の改訂に伴い選定7科目の枠が外され、primary care medicine での基本的事項の修得が要求されている。この点から考えても正にタイミングのよい企画であり、改訂書であるといえよう。

以上のように、本書は今日の医学教育での臨床検査のあり方をも十分配慮して企画・編集されており、医学生が検査医学を学ぶに際して問題解決型の思考を修得するうえでも大変参考になろう。同様のことは卒後研修の場にある者に対してもいえることと思うし、研修医または、実地臨床医にとっても本書は有益で、そばに置き、日常臨床の場で利用することのできる検査医学、臨床検査法の決定版といえる。

● B5 546頁 図117 写真112
 原色図63 1992 定価8,240円
 (税込) ㊦300円

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)